

に數種の滿語研究書が次々に出來たこと、既に新村博士の述べられた通りであるが、當時可なり事情のわかり合つてゐた筈の江戸と長崎との間に於ても、這般の消息は碌に知れなかつたものと見え、この前年即ち嘉永三年から新たに滿語翻譯の事業が長崎に於て始められたのである。従つて長崎では此の事業に關して江戸との間に何等の聯絡もなく單獨の事業として、曾て四十餘年の昔に高橋が嘗めたと同じやうな辛苦を若い通事達が重ねたもので、この點誠に氣の毒に堪へぬ。但し高橋の事業が著しい成果を挙げたものにしても、なほ長崎の成果を悉く覆ふものでないことは、兩者を細かに比較して見る人には明らかなことで、これは前者を參照し得なかつた不幸の齎した幸運であつたともいふことが出來よう。

文化五年高橋景保が露西亞國呈書滿文の訓譯を命ぜられた年には、長崎の唐通事にも滿洲語修學の命が幕府から下された(上引藝文參照)。然るに長崎では一向この事が進捗せず、その後も重ねて命ぜられて復た成らず、當初から五十年近い嘉永四年に至つて始めて成果の第一歩を踏み出すを得たについては、或は事に當つた唐通事が滿語研究を脞しとしなかつたが爲ではないかといふ意味の推察が、新村博士の編述中に見え、その證として蔡慎吾といふ人の墓誌に、これを裏書する文字が見える由であるが、目睹するに及ばなかつた旨が述べられてある。余もこのことに關心を持ち長崎逗留中にこの墓碑の穿鑿に苦心した結果、これも増田氏の盡力に依つて、遂に名高い本蓮寺の墓地からこれを發見することが出來た。これに據ると滿語研究の命令を蒙りながら辭退して應じなかつたのは、蔣慎吾の父に當る綺石先生といふ人で、慎吾は明治九年に三十八歳で没したとのことであるから、その生時は天保十年に當る。また「十歳失怙」といふから、綺石先生の没したのは嘉永元年である。生壽は判明し難いが、兎も角上述初め